J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol. 13, No. 2 (2009) 59～70

万葉集391番歌の解釈と「とぶさ立て」の語義について

竹生　政資[1]，西　　晃央[2]

An Interpretation of the 391th Poem and the Meaning of the Expression "Tobusatate" in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要　　旨

万葉集391番歌は、原文の訓読については諸本とも「とぶさ立て 足柄山に 船木伐り 木に伐り行きつ あたら船木を」でほぼ一致しているが、発句「とぶさ立て」の語義と歌の解釈についてはまだ問題が残されている。「とぶさ」に関する現在の通説は、平安時代の辞書である色葉字類抄に「朶 トフサ・エタ」などとあることから、「枝」（あるいは「梢の枝葉」）の意に解されている。また「とぶさ立て」は、樹木を伐採する前にその木の精霊をあらかじめ抜いておくため、梢の枝葉を伐って他の地上に移し立てる儀礼があったことを想定し、こうした儀礼と関連付けて解されている。しかしながら、たとえ「とぶさ」が「枝」の意味をもっていたにせよ、なぜ「枝」が「とぶさ」なのか、またなぜ原文で「とぶさ」が「鳥総」と表記されるのか、十分納得のいく説明はまだない。

一方、歌の解釈については、最近の万葉集注釈書、例えば新日本古典文学大系は「鳥総（とぶさ）を立てて足柄山で船木を伐り、それをただの材木として伐って行ったよ。惜しい船木だったのに」と解しているけれども、本文中でも指摘するように、このような解釈にはいくつか問題点がある。さらに、この歌は「譬喩歌」に分類されているけれども、具体的に何の比喩なのか、諸説はあるけれどもまだ十分に納得できるものはない。

本論文では「とぶさ」の語義について次のように解釈する。「とぶさ」は原文では「鳥総」と表記されているが、これは直接的にはニワトリの「トサカ」を意味するもので、「とり（鳥）＋ふさ（総・房）＝とりふさ」が音韻転訛したものと考える。上代語の「ふさ（総・房）」は「多くのものが房のように集まっているもの」を意味するから、ニワトリのトサカが「房」状をしていることと合致する。さらに、トサカはその形状がギザギザしているから、これが「ノコギリ（鋸）」を連想させ、結果として「とぶさ＝トサカ」は間接的に「ノコギリ」を意味する。当時すでにノコギリが存在していたことは考古学的に実証されているから、船木を伐るのに「ノコギリを立てて」船木を伐ったことは疑いなく、「とぶさ立て」とはまさにこのことを意味するにちがいない。391番歌を解釈する上でもっとも重要なポイントは以上の視点に立ってみることである。具体的な歌の意味や、歌の比喩内容については本文中で詳しく考察する。

[1] 佐賀大学　医学部　地域医療科学教育研究センター（takefu@cc.saga-u.ac.jp）
[2] 佐賀大学　文化教育学部　理数教育講座（nishia@cc.saga-u.ac.jp）

1．はじめに

この論文で取り上げる万葉集391番歌は、巻三の「譬喩歌」に分類された二十五首（390番歌から411番歌まで）の中の一首である。まず歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本によって掲載することから始めよう[1]。

造筑紫観世音寺別当沙弥満誓の歌一首
03/0391　とぶさ立て　足柄山に　船木伐り　木に伐り行きつ　あたら船木を
【原文】鳥総立　足柄山尓　船木伐　樹尓伐帰都　安多良船材乎

この歌の原文発句は「鳥総立」となっているが、これを「とぶさ立て」と訓む確かな根拠は万葉集中に次の歌が存在することによる[2]。これは大伴家持の作った旋頭歌で、題詞には二首とあるが第二番目の4027番歌は省略した。

能登郡にして、香島の津より船を発して、熊来村を射して往きし時に作りし歌二首
17/4026　とぶさ立て　船木伐るといふ　能登の島山　今日見れば　木立繁しも　幾代神びそ
【原文】登夫佐多氐　船木伎流等伊布　能登乃嶋山　今日見者　許太知之気思物　伊久代神備曾

この歌の原文発句は「登夫佐多氐（とぶさたて）」と一字一音の万葉仮名で表記されており、また第二句の原文「船木伎流」も「船木きる」と訓むことは疑いない。これによれば、391番歌の発句「鳥総立」は4026番歌の発句「登夫佐多氐（とぶさたて）」に対応し、391番歌の第三句「船木伐」は4026番歌の第二句「船木伎流」に対応することもまた疑いないであろう。よって「鳥総立」は「とぶさたて」と訓むべきことが確かめられる。

発句以外の句の訓読については特に問題がなく、古来ほとんどの万葉集注釈書で同じ訓みがとられてきた。また、「足柄山」と「船木」の関係については、下河辺長流『続歌林良材集』上「あしから小船の事」条に以下の内容が記載されていることから、足柄山が特に上質の船木の産地であったことがわかる[3]。

> 相模国風土記に云。足軽山は此山の杉の木をとりて舟につくるに、あしの軽き事他の材にて作れる船にことなり。よりてあしからの山と付たりと云々。

391番歌の解釈でもっとも難しいのは、発句「とぶさ立て」の「とぶさ」の語義と、「とぶさ立て」が具体的にどのような行為を表わすのか、この二点にしぼられる。この問題については平安時代の昔から議論があり、とりあえず今日通説となっている説はあるものの、第３節で見るようにいまだ完全解決とは言い難い。また、391番歌は「譬喩歌」に分類された歌の中の一首であるが、具体的に何を比喩しているかについても議論がある。以下、第２節ではまずこれまでの主な先行研究を紹介し、続く第３節ではその問題点を明らかにし、第４節でこれらの問題点を解決できる新しい解釈を提案する。

2．先行研究

この節ではまず、391番歌に関する主な先行研究を知るために、これまでに出版された代表的な万葉集注釈書に掲載されている歌の注釈と大意を出版年の新しいものから順に掲載する。原文と訓読文については各注釈書とも前節に掲載したものとほとんど同じであるので省略した。また、記載形式をそろえるため内

容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更した。

2．1　新日本古典文学大系の解釈[1]

【注釈】大伴家持の旋頭歌に、「とぶさ立て船木伐るといふ能登の島山今日見れば木立しげしも幾代神びそ」（四〇二六）ともある。樹木を伐採する前に、その木の精霊をあらかじめ抜いておくため、梢の枝葉を伐って、他の所、例えば地上に移し立てる儀礼があったらしい（平林章仁『鹿と鳥の文化史』）。「とぶさ」は枝。「朶　トフサ・エタ」（色葉字類抄）。「足柄山」の杉の木は船の良材であった。「百つ島足柄小舟あるき多み」（三三六七）。「あたら」は不相応に低く評価されることを惜しむ気持ちで用いる。「開けまく惜しきあたら夜を」（一六九三）。

【大意】鳥総（とぶさ）を立てて足柄山で船木を伐り、それをただの材木として伐って行ったよ。惜しい船木だったのに。

2．2　新編日本古典文学全集の解釈[4]

【注釈】とぶさ立て―トブサは枝葉の茂った梢。木を伐る時に、切株の上にトブサを刺して山の神に奉る風習があった。祝詞「大殿祭（おおとのほかい）」に、「今奥山の大峡（おほかひ）小峡に立てる木を、斎部（いむべ）の斎斧をもちて伐り採りて、梢をば山神に祭りて、中間（なから）を持ち出で来て」とある。

○船木伐り―わたしが船材にしようと心に決めていた木を伐って。逸文『相模国風土記』に、「足軽（あしから）山は、此山の杉の木をとりて船に造るに、脚の軽き事他の材にて作れる船にことなり。よりてあしからの山と付たりと云々」とある。

○あたら船木を―アタラはその真価相当に扱われないことを惜しむ副詞。またアタラ夜・アタラ盛リなど接頭語的に用いる。

【大意】とぶさを立て　足柄山で　船木を伐って　ただの木に伐って行きおった　惜しい船木なのに

【比喩の意味】意中の女性を他人に奪われた悔しさをたとえた歌であろう。

2．3　講談社文庫（中西進）の解釈[5]

【注釈】鳥総立て―梢をもって鳥の総状のものを作り山神に供えたものか。集中もう一首（四〇二六）も船木で、鳥総は特にその為の信仰か。船の速さを鳥にことよせる習慣がある。したがって上三句、せっかく船木として伐りながら、となる。

○樹に伐り行きつ―（船材としてでなく）木トシテ伐っていった。伐り方の相違をいう。せいぜい建材なら、もう巨大な船材としては使えない。

○あたら―「惜（あた）らし」の原形。残念なこと。

【大意】鳥総を立てて足柄山に船材を伐りながら、木として伐っていってしまった。惜しいことに、船材を。

【比喩の意味】良家に嫁すべき女性の結婚を譬喩したか。→三八二一。

2．4　日本古典文学大系の解釈[6]

【注釈】鳥総立て―トブサは木の末や枝葉の茂った先。樹木を伐るには、伐った後に山の神に対してそのトブサを立てておく風習があった。○足柄山―神奈川県足柄上郡。○船木―舟を作るに用いる木。

○樹に伐りゆきつ―材料として切って行った。一説に、ただの材木として切って行った。

○あたら―惜しい。

【大意】とぶさを立てて足柄山で舟木を伐り、よい木として伐って持って行った。惜しい木であったのに。
【比喩の意味】よい娘を誰かに先に取られたのであろう。

2．5　萬葉集註釈（澤瀉久孝）の解釈[7]

【注釈】全文が長いため要点だけを部分的に抜粋した。
○とぶさ立て―まず「とぶさ」の語意としては、主に「鐇（たつき）（刃の広い斧）」とする説、「木の梢」とする説、「柿（こけら）（木端（こっぱ））」とする説の三つの説があるが、字鏡集（五）の「朶」にトフサの訓があること、色葉字類抄にも同じく「朶」にトフサとあることなどから、萬葉集講義（詳細は以下の２．６節を参照）も説くように、ここの「とぶさ」は「朶」の意味で「立木の末の枝葉の部分」を指しているものと解すべきである。次に「とぶさ立て」の語意は、杣人が木を伐るとき山神を祭るという意味であり、伐った木の末の部分を切って元の切株の所に立てて山神を祭る風習を意味すると解すべきである。その根拠は、八雲御抄（四）や冠辭考などに同じ風習に関する記述があることである。日本人は老樹を恐れ尊む事が強く、今の世にも老木の話し声を聞いたという人のあるくらいであるから昔の人が、船材のような巨木を伐る場合にこうした行事をするという事は極めて当然の事として認められる。
○足柄山に船木伐り―足柄の訓みは集中に「アシガラ」とも「アシガリ」ともあるが、アシガリはその地方で訛って云われたもので、普通には今と同じくアシガラと呼ばれていたものと思われる。足柄峠は神奈川県と静岡県との境にあるが、足柄（上下）郡は神奈川県にあり、万葉でも足柄の歌は相模国の中に収められている。船木は船に造る材で、巨木を要したので足柄山はその産地として知られており、そのことは下河辺長流の続歌林良材集（上）の記事や万葉集中に「あしがりのあきなの山にひこ舟の」（3431番歌）や「足柄小舟」（3367番歌）などの表現があることなどからわかる。その船材を足柄山で伐り出し、というのが「足柄山に船木伐り」の意味である。
○木に伐り行きつあたら船木を―「木に伐りゆく」には二つの解釈がある。一つは、船材とすべき木ではあるが船材にしないでただの材木とする、という説である。もう一つは、本来は「船木に伐りゆく」と言うべきところを、直前の句に「船木」の語があるので後の句では「船木」を「木」と略して「木に伐りゆく」と表現したもの、とする説である。前者の説は、結句に「あたら船木を」とあることに注目し、もし船材を船材として伐って行ったというのであれば「あたら」と言うはずはなく、船材を他の用途に供したからこそ「あたら」と言っているのだという考えが根底にある。一方、後者の説では、舟木を舟木として伐ったというだけならば「あたら」となげくことはないだろうが、作者は「伐りゆきつ」と云っているのであり、すなわち「よそへ持って行ってしまった」のだから「あたら舟木を」となるのだと考える。以上の二つの説のうち、後者の説の方が適切な解釈であろう。結句は第三句に語を補ってくりかえした形であり、第三句以下は散文に直せば「あたらしき舟木を伐りゆきつ」とだけに短縮する事もできるのであるが、「木」を三たびくりかえし、「伐り」を二度かさね、「あたら舟木を」を結句に据えて詠歎の情を示そうとしたのである。なお、原文の「帰都」をヨセツと訓む説があるが、「帰」をヨセと訓む事も漢字の字義としては認められ用例もあるが、集中の例としては確例がなくやはりユク、カヘルと訓むべきであろう。
【大意】とぶさを立てて足柄山の船材を伐り、船材として伐つて行つてしまつた。立派な船材を。
【比喩の意味】「譬たる意は我うつくしとおもひ慕ひし女を大内或はよき家などへよびて多くの中になめげにておかるゝををしむこゝろなり」や「自分が懸想して本妻にと考へてゐた女を、横合から出て来た人に妾か何かに持つて往かれてしまつた」などと解する説もあるが、いずれも「木に伐りゆきつ」の誤解から生まれたもので、作者はそこまで云つてゐるのでなく、たゞ女を他人に取られたくやしさを述べたまでであり、それもはじめから作者が思ひ慕つてゐたといふよりも、ひとのものとなつたと聞いて今更に心惹

かれたので、それが「あたら舟木を」の結句にそのまゝ出てゐると見るべきではなかろうか。

2．6　萬葉集講義（山田孝雄）の解釈[8]

【注釈】全文が長いため要点だけを部分的に抜粋した。

○鳥総立―4026番歌に「登夫佐多氐」とあるから本歌の「鳥総立」は「トブサタテ」と訓むべきである。まず「とぶさ（鳥総）」の語義としては、近世以前には「たづき（木を伐る斧などの道具）」とする説、「木の末（梢）」とする説、「こけら（木屑）」とする説の三説があった。その後、この三説に対していろいろな観点から賛否両論の議論が展開されてきた。例えば、「たづき」説の一つとして、鴻巣氏は、屋久島では木を伐採する前にその木の根本に斧を立てかけておき、その斧が倒れていないときだけ神意に叶うものとして安心して木を伐採するという風習をあげ、古代にもこうした風習があることを想定し、「とぶさ」を「斧」、「とぶさ立て」を神意を伺う行為としての「伐採予定の木に斧を立てかけること」と解した。しかし、「とぶさ」が「斧」の古名だという確かな証拠はない。上の三説のうち適切だと思われるのは「木の末（梢）」説である。その根拠は次の三つである。第一は、字鏡集（鎌倉前期の漢和字書）や色葉字類抄（平安時代の辞書）で「朶」の字に「トブサ、エダ」の訓が付けてあること。第二に、「朶」の字義は「しだれる」であり「枝葉のふさふさと多くつける木末」を指しているものと思われること。堀川百首の源俊頼の歌「卯花も神のひもろぎかけてけり、とぶさもたわにゆふかけて見ゆ」や後拾遺集第十三・恋三の大中臣輔親の歌「わが思ふ都の花のとぶさゆゑ君もしづえのしづ心あらじ」の「とぶさ」もこの意味であろう。輔親は平安中期の人だから「とぶさ」を「朶」の意とする用法は少なくとも平安時代中期以前にさかのぼる。「とぶさ」の語源について冠辞考（賀茂真淵）は次のように述べている。遠江や越前や土佐などで木の最末を「とぼさき」と言っているが、これは「遠先（とほさき）」の意であり、「ぼ」が「ぶ」に音韻転訛し、「き」が脱落して「とぶさ」となったものだろうと。次に「とぶさ立て」の意味については、杣人が木を伐るとき山神を祭るという意味であり、伐った木の末の部分を切って元の切株の所に立てて山神を祭る風習を意味すると解すべきである。その根拠は延喜式祝詞の大殿祭や大神宮心御柱記にこの風習を裏付ける内容があることである。この風習は今も正月の門松を除き去る時にはその松の末を折って、その跡に立てておくことは誰人も知るところである。以上の説に対して、鴻巣氏は「船木となる大樹を切った後に、その梢の部分を立てて山神を祭るものとしては、とぶさたて船木切る、という言ひ方では、とぶさを立てる動作が船木を切る動作よりも前のように聞えて穏やかではない」と非難しているが、このような事実と言語上の相前後する言い方は集中に例が多いので特に問題ではない。例えば、4407番歌に「島伝ひい漕ぎ渡りて」という表現があるが、実際には「漕ぎ渡ってはじめて島伝をなしうる」から事実と言語表現が逆になっている。また、4016番歌に「売比の野のすすき押しなべ降る雪に」という表現があるが、これも実際には雪が降ったためにススキが靡くのであるから事実と言語表現が逆である。現在話されている言葉も歌も言葉を論理的に排列したものではなく、理屈をもって古歌を律するのは無理がある。なお、従来多くの説は「とぶさたて」を枕詞としてきたが、もし枕詞であるならば終止形の「とぶさたつ」となるべきであるが4026番歌に「登夫佐多氐（とぶさたて）」とあるから、「とぶさたて」は枕詞ではなく第三句の「船木伐」に続く修飾語と解すべきであろう。

○足柄山爾―「アシガラヤマニ」と訓む。足柄山は相模国の山である。

○船木伐―「フナキキリ」と訓む。船木は船を作るための木材で、この頃の船は木材をはぎ合せて作る堅牢な船もまだ十分には発達していなかったから、大きな船を作るには大きな材が必要だったのだろう。このため当時は船木といえば巨大な材であったものと思われる。また、古くは足柄山で巨大な船材が産出されたのだろう。

○樹爾伐帰（都）―「キニキリユキツ」と訓む。「帰」字を「ヨセ」または「カヘ」と訓む説もあるが、少なくとも万葉集中にはこのように訓む例はないので「ユク」と訓むのがよい。この句全体の意味は、「船木として伐って持って行った」の意であろう。
○安多良船材乎―「アタラフナキヲ」を訓む。「アタラ」は可惜の意で、副詞であるが、形容詞としては「アタラシ」という。「アタラフナキヲ」の句は反転法によって歌の最後に置かれたもので、意味は「アタラフナキヲ」伐り行きつ、の意である。
【大意】足柄山に立てる巨大なる樹をば、朶（トブサ）を立て山神に祭りてこれを船材として伐りて持ち行きたり。誠に惜しむべき巨大なる材木なるをきりてもてゆきたりといふなり。
【比喩の意味】この歌の趣は旁観的の気分十分にありて、本人が恋の当事者たる程の強き感はなし。これは軽く或る美人が、誰人かの専有になりしをば、多くの恋人が、これを羨ましく思へる心をばうたへるか、或は、自己には深き恋心もなけれども、あの美人が、一人の占有になりしを見て、恰も、深山の大樹が、自由にそだちしを船材によしとて切りてもてゆかれしが如く、傍観者としても惜き感あるをうたへるものなるべし。

3．先行研究における問題点

発句「とぶさ立て」の検討に入る前にまず、前節にあげた先行研究の「とぶさ」についての解釈をまとめておこう。

新日本古典文学大系	「とぶさ」は枝。
新編日本古典文学全集	トブサは枝葉の茂った梢。
講談社文庫（中西進）	梢をもって鳥の総状のものを作り山神に供えたものか。
日本古典文学大系	トブサは木の末や枝葉の茂った先。
萬葉集註釈（澤瀉久孝）	「とぶさ」は「朶」の意味で「立木の末の枝葉の部分」を指す。
萬葉集講義（山田孝雄）	枝葉のふさふさと多くつける木末。

このように通説では「とぶさ」は「枝」や「枝葉の茂った梢」の意に解されてきた。また、「とぶさ立て」という行為は、諸本によって少し表現の相違はあるものの「木を伐るとき山神を祭る行為」あるいは「木を伐る際に伐った木の末の部分を切り切株の所に立てて山神を祭る風習」と解されてきた。中には、講談社文庫（中西進）のように、「とぶさ」が「鳥総」と表記されていることを重視し、「鳥」との関連を想定して「船の速さを鳥にことよせる習慣」と解しているものもある。しかし、その根拠については触れられていない。

さて、前節に示した先行研究の具体的な問題点について指摘しよう。まず第一に、色葉字類抄などに「朶トフサ・エタ」とあることから、「とぶさ」が「枝」を意味することは確かであるが、しかしなぜ「とぶさ」が「鳥総」と表記されるのだろうか。「とぶさ」という語の語源と「枝」とはどういう関係があるのだろうか。なぜ「枝を立て」という表現をとらずに「とぶさ立て」と言うのだろうか。いまだこれらの基本的な疑問に十分に答えられる説は存在しない。

第二に、2．6説の萬葉集講義の注釈の中に述べられている鴻巣氏の批判に関する問題点である。通説は、発句の「とぶさ立て」という行為を「木の伐採に際して梢を切って元の木の切株の所に立てて山神を祭る風習」と解するが、その最大の根拠は延喜式祝詞（大殿祭）の次の記述である[9]。

...天つ日嗣知ろしめす皇御孫の命の御殿を、今奥山の大峡・小峡に立てる木を、斎部の斎斧をもちて伐り採りて、本末をば山の神に祭りて、中間を持ち出で来て、斎鋤をもちて斎柱立てて...

もし当時巨木を伐採する際に「とぶさ立て」という行為が当然のこととして行われていたならば、この祝詞にも「とぶさ立て」という表現があってよさそうに思えるが、この点については今は目をつぶることにする。ここで問題にしたいのは、「とぶさ立て」という行為と「木を伐る」という行為の「順序」である。この観点から上の祝詞の内容を検討してみると、通説の「とぶさ立て」の解釈と矛盾するところがある。祝詞によれば、山の木を伐採した「後」で、その木の「本末」を山の神に祭り、中間の部分を持ち出して天皇の御殿の柱にする、という内容になっている。すなわち、この祝詞にしたがうならば、船木を伐った「後」に「とぶさ立て」を行なうことになる。ところが、歌では「とぶさ立て（足柄山に）船木伐り」と歌われており、まず「とぶさ立て」を行なってから船木を切るという表現になっている。ここに通説の矛盾があり、鴻巣氏はこの点を批判したのである。もし歌の「とぶさ立て」が通説の言うように「木の梢を山神に祭る行為」を意味するものであるならば、

あしがらの　船木を伐りて　とぶさ立て...

のように「とぶさ立て」は発句ではなく第三句に来るのが自然なのである。

この鴻巣氏の批判に対して、山田孝雄氏は、歌というものは言葉を論理的に配列したものではなく、理屈をもって古歌を律するのは無理があると言う。そして、理屈に合わない例として4407番歌（正しくは4408番歌）の「島伝ひい漕ぎ渡りて」と4016番歌の「売比の野のすすき押しなべ降る雪に」の二つをあげている。前者は「漕ぎ渡ってはじめて島伝をなしうる」から事実と言語表現が逆で、後者も同様に「雪が降ったためにススキが靡く」のであるから事実と言語表現が逆だと言う。しかしながら、表現の内容をよく見て欲しい。「島伝ひい漕ぎ渡る」というのは、例えば、博多から朝鮮半島に手漕ぎ船で行くときに、直接に博多から朝鮮半島ではなく、まず博多から壱岐に行き、次に壱岐から対馬に行き、最後に対馬から朝鮮半島に行く、というように「島伝いに、漕ぎ渡って行く」という意味であり、事実と言語表現が逆どころかぴったり一致しているのである。また、後者の「すすき押しなべ降る雪」も、雪は少しずつ連続的に降るのであり、それが少しずつ積もり、積もった量に応じてすすきの靡き方が変化していく。雪が降るのと積もった雪の重みですすきが靡くのは「同時進行」であり、決して「すすき押しなべ降る雪」という表現は事実（理屈）に反しているわけではない。したがって、この二つの例を根拠にして、「とぶさ立て 船木伐り」という表現と「船木を伐り とぶさ立て」という表現が内容的にはまったく「同じ意味」なのだと言われても納得のしようがない。

第三に、この歌は「譬喩歌」に分類された歌の一つであるから必ず「比喩の意味」があるはずである。ところが、通説のような解釈ではこの「比喩の意味」がもっぱら憶測にたよるしかなく、はっきりとしたイメージが描きにくい。というのは、通説の解釈による限り、歌に含まれる情報は「りっぱな船材を、惜しいことにただの材木として伐って行った」あるいは「まことに立派な船木を船材として伐って行った」というだけであり、これだけから「比喩の意味」を読み取るのは困難である。

4．新しい解釈の提案

以上見てきたように、「とぶさ」の解釈も「とぶさ立て」の解釈も、通説のような解釈ではまだ十分とは言えない。少なくとも平安時代に「枝」を表わす「とぶさ」という語があったこと、また延喜式祝詞の大

殿祭にあるように樹木を伐採した後に「本末」を山の神に祭る風習があったこと、この二つは事実として認めざるをえない。しかしそのことは、391番歌の「とぶさ立て... 船木伐り」における「とぶさ」を「枝」と解し、「とぶさ立て」を「枝を切株に立てて山神を祭る」ことと解してよいことには必ずしもならない。そもそも延喜式祝詞には「本末を山の神に祭る」とあり、通説が言うように「枝を切株に立てて祭る」という「立てる」という動作は祝詞には述べられていない。万葉集には、神に祈ったり神を祭ったりする歌は多いが、例えば「木綿だすき 肩に取り掛け 倭文幣を 手に取り持ちて な放けそと 我れは祈れど」(4236番歌) などのように具体的に祈る様子を表現している場合が多い。これに対して、「とぶさ立て」は祭りの行為を表現したものとしてはあまりにも単純すぎ、むしろ船木を伐る「様子」を表現したものではないかという気がするのである。また、平安時代の辞書に「とぶさ」の意味として「枝」とあるが、「えだ」という音と「とぶさ」という音には何ら共通性がなく、「枝」の意は派生的なもので「とぶさ」の原義ではない可能性が高い。そこで、こうした問題を解決するためにはどうしても「とぶさ」という語の語源にさかのぼって考えてみる必要がある。

新しい解釈の重要なポイントは、「とぶさ」が原文で「鳥総」と表記されていることに注目し、「とぶさ」の語源を「とり（鳥）＋ふさ（総・房）＝とりふさ」と解釈し、「とりふさ」が短縮化して「とぶさ」となったと考えることである。というのは、「鳥のふさ（総・房）」と言われたら、おそらく多くの人がニワトリの頭にある「トサカ」を連想するだろうからである（図を参照）。したがって、「とぶさ」の直接的な意味をニワトリの「トサカ」だとする考えはごく自然な発想だと言える。

そこでまず、この考え方の妥当性について検討してみよう。「ふさ」という上代語について『時代別国語大辞典 上代編』は次のように説明している（[10]、p. 632）。

ふさ〔総・球〕
①形状語。多くのものが房のように集まっているさまをあらわす。平安時代にはフサニと、はっきり副詞の形をとり、フサフサトという例もあるが、上代の確例はフサタヲリの形のみ。フサヌやフサフはここからの派生か。（用例は省略）
②茎や枝についたままの花や実を数える助数詞。（用例は省略）

「ふさ」が上代語で、「とり（鳥）」も上代語であるから、この二つの語が結合して「とりふさ」という複

合語が作られた可能性は十分にある。また、ニワトリのトサカがギザギザして「多くのものが房のように集まっている」形状をしていることから、「とりふさ」が「トサカ」を意味した可能性も十分にある。ちなみに、「とり」の「と」は乙類の仮名であり、4026番歌の発句に「登夫佐多氐（とぶさたて）」とある「とぶさ」の「と」は「登」で乙類の仮名であり、「とぶさ」を「とり（鳥）＋ふさ（総・房）＝とりふさ」と解することは上代特殊仮名遣に反しない。

さらに、「トサカ」を意味する「とぶさ」という語とほとんど同じ発想によって作られたと思われる語が存在する。それは「ちぶさ（乳房）」という語である。「ちぶさ」は万葉集には登場しないけれども、上代語であることは確かで、日本霊異記上二三話に「母出其嬭房＜知夫佐（ちぶさ）＞而悲泣之日」として登場する（[10]、p.456）。この語は「ち（乳）＋ふさ（房）＝ちふさ」が「ちぶさ」と音韻転訛したものであることは疑いないであろう。だとすれば、「とりふさ」が「とぶさ」に音韻転訛したのも似た現象だと考えることができる。「ちぶさ」においては、「ち」と「ふさ」が結合する際に「ふ」が濁音化しているが、「とぶさ」の場合は「とり」の「り」が脱落した上で「ふ」が濁音化している。

以上のように、「とぶさ」という語の原義がニワトリの「トサカ」を意味することは、この言葉の語源を考察することによっても裏付けられる。もしこの考え方が正しければ、トサカの形がギザギザしている様子は「ノコギリ（鋸）」の歯のギザギザを連想させるから、結果として「とぶさ」が間接的に「ノコギリ」を意味した可能性は十分にある。問題は、万葉時代にノコギリが存在したかどうかであるが、これはすでに考古学的に実証済みである。ノコギリの歴史について小学館の百科事典「SuperNipponica2001」は次にように述べている。

> （前略）金属製の鋸としては、古代エジプト第18王朝時代（前1500ころ）の銅製のものが、現在知られている最古のものである。さらに鉄の鋸としては、紀元前８世紀のエジプト（テーベ）のものがもっとも古い。（途中略）わが国では古墳時代の出土品が最古のもので、厚い短冊形の鉄板に歯を刻み、上から押し付けて使う原始的なものから始まり、７世期の古墳時代末期までにすでに今日の歯形がほぼ完成している。法隆寺金堂や五重塔には、盛んに横挽鋸を使用した痕跡がみられるが、鋸の形態について触れているのは『倭名鈔』の「鋸、和名能保岐利。刀に似て歯ある物なり」とあるのが初めてで、ほかの文献にはなく、確定的な遺物も残っていない。したがって、平安時代なかばごろまで一般に使われていた鋸の形態は、いまのところ不明である。

木を切るための代表的な道具の一つであるノコギリが当時すでに存在していたことは事実であるから、「木にノコギリを立てて」船木を伐ったことは疑いない。したがって、391番歌の中の「とぶさ立て... 船木伐り」というのはまさにこのことを表現していると考えられる。

さて次に、以上で述べたような「とぶさ」を「トサカ」とする考えと、平安時代の辞書である色葉字類抄に「朶 トフサ・エタ」と記載されていることが果してコンシステントであるかどうか、この点について検討してみよう。少なくとも平安時代には「とぶさ」に「朶」の字が当てられ「枝」を意味したことは事実であるから、まず「朶」という漢字の意味を調べてみよう（[11]、pp. 859-860）。

①しだれる。樹木の枝葉・花実などが垂れ下がる。
②えだ。花のついた枝。また、その序数詞。
③うごかす。

ここで注目すべき点は、「朶」が「枝」を表わすのは事実であるが、枯れ枝や一般的な枝ではなく、特に「花が付いて垂れ下がっている枝」を意味している点である。このことは、２．６節の注釈に引用されている「とぶさ」を含む平安時代の次の二つの歌からも裏付けられる。

卯花も神のひもろぎかけてけり、とぶさもたわにゆふかけて見ゆ
わが思ふ都の花のとぶさゆゑ君もしづえのしづ心あらじ

いずれも「とぶさ」は「花」と一体のものとして歌われている。白い花を枝先にいっぱいに「房」状に付けてたわんでいる卯花の枝は、見方によってはニワトリの頭にトサカがギザギザと「房」状にあるのと比喩的に似ていると見えなくもない。桜の花が枝先までいっぱいに咲いてたわんでいる枝についても同様である。すなわち、たわんだ枝に白い（あるいは薄ピンク色の）花がギザギザと「房」状に分布している状態はニワトリのトサカと共通するイメージをもっていると考えられる。ちなみに、「みみたぶ」を「耳朶（ジダ）」というが、「みみたぶ」は「鳥のトサカ」に似ているから、「朶」は「鳥のトサカ」のようなイメージを含んでいることがこの例からもわかる。

さて今度は、391番歌の「比喩の意味」について考えよう。その前にまず、「とぶさ」を「ノコギリ」とする新しい視点に立って、この歌の比喩でない「通常の意味」を確認しておこう。

ノコギリを立てて、足柄山のりっぱな船木を伐りながら、船材としてではなく単なる材木として伐って行った、惜しい船材の木なのに

第三句の「木に伐り行きつ」の解釈については、山田孝雄氏と澤瀉久孝氏はあくまでも「船材として伐って行った」と解しているが、それよりもむしろ２．５説の注釈の中でも議論があるように、もし船材を船材として伐って行ったというのであれば結句で「あたら」と言うはずはなく、船材を他の用途に供したからこそ「あたら」と言っているのだという考え方に従いたい。最近の四つの注釈書もすべてこの解釈をとっている（２．１節から２．４節を参照）。

次に、この歌の「比喩の意味」であるが、結論を先に示すと次のようになる。

ある男が勇ましそうに、特別にいい女に何度も言い寄ったものの、ガードの堅さに懲りてあきらめて帰って行った、惜しい女だったのに

まず発句「とぶさ立て」の「とぶさ」は普通の解釈ではノコギリを意味するが、原義はトサカの意である。ちなみに、万葉集210番歌では「男」が「鳥穂」という表記によって「義訓」的に表現されているが、この「鳥穂」も391番歌の「鳥総」と同じようにニワトリのトサカを意味しているものと思われる（詳細については[12]を参照）。したがって、トサカが「オス」のシンボルであることを考慮すると、歌の比喩の解釈としては、「とぶさ立て」を「トサカを立て」と解し、これを「雄々しく」あるいは「勇ましそうに」と解することができる。

次に、第二句の「足柄山」は、普通の解釈では「特にりっぱな船木がとれる産地」を意味したが、比喩の解釈では、「船木」を「女」の比喩だと見なすと、「足柄山」は「女が特別にいい女であること」を意味するものと思われる。

第三句の「船木伐り」は、実際に船木を伐るためには「何度も何度も」繰り返してノコギリを挽かなけ

ればならないことから、比喩の解釈では何度も何度も男が女に言い寄ってアタックすることを意味していると考えられる。

第四句の「木に伐り行きつ」（原文は「樹尓伐帰都」）の比喩の解釈は難しいが、まず「樹＝木」と同じ乙類の「き」に「城柵」（外敵の侵入を防ぐための砦）の意味があることに着目する（[10]、pp.236-237）。次に、原文の「伐」は「きる」とも「こる」とも訓めることに着目し（[10]、p.314）、「こる（伐る）」が同じ発音の別の上代語「こる（懲る）」（懲りる、失敗して二度と繰りかえすまいと誓う）を連想させることに注目する（[10]、p.314）。ちなみに、「こる（伐る）」と「こる（懲る）」の「こ」はともに乙類で同じ音である。以上述べたことから、「き（城柵）」を「女の堅いガード」の比喩だと見れば、第四句は「女のガードが堅くて、男は懲りてあきらめて帰って行った」と解することができる。なお、普通の解釈では「船木を伐採しておきながら、船材としてでなく材木として伐って行った」と「本来の目的が達成されなかった」ことが惜しまれているが、これに対応して比喩の解釈でも「男がいい女に勇ましそうに何度もアタックしたが結局は失敗に終わった」と、ここでも「本来の目的が達成されなかった」ことが惜しまれている。以上述べたことを対応表の形でまとめると次のようになる。まず歌の「普通の解釈」をまとめたのが次の表である。

原　文	普通の解釈	
	訓　読　文	意　　味
鳥総立	とぶさ（ノコギリ）立て	ノコギリを立てて
足柄山尓	足柄山に	高級な船材の産地
船木伐	船木伐り	船木を伐り
樹尓伐帰都	木に伐り行きつ	材木として伐り
安多良船材乎	あたら船木を	惜しい船材だのに

同様に、歌の「比喩の解釈」をまとめたのが次の表である。

原　文	比喩としての解釈	
	訓　読　文	意　　味
鳥総立	とぶさ（トサカ）立て	雄々しく，勇ましそうに
足柄山尓	足柄山に	女の質が特別にすぐれていること
船木伐	船木伐り	女に何度も言い寄りアタックすること
樹尓伐帰都	城柵（き）に懲り行きつ	女のガードが堅いのに懲りてあきらめて帰って行った
安多良船材乎	あたら船木を	惜しい女だったのに

最後にこの節を終えるにあたって、現在我たちが使っている「ノコギリ」という語の古語が平安時代の和名抄に「能保岐利（のほぎり）」となっている理由について考えておこう。「のほぎり」の語源については『日本語源大辞典』に以下のような説が挙げられている[13]。

①ノボリキリ（登切）の義か<名言通>。ノボリキル（上切）の意か<大言海>。ノボセギリの義か

＜和訓栞＞。

②ノビハギリ（延刃切）の転略＜大言海＞。ノハキリ（延歯切）の義＜言元梯＞。

③ノは刀の義、ホはハ（歯）の転、キリは切の義＜東雅＞。

④ノホなる歯でキルものの意。ノホはギザギザなど、錯雑したさま＜続上代特殊仮名音義＝森重敏＞。

しかしながら、これらの説の中に十分に説得力のある説は見当たらない。おそらく、「のほぎり」の語源は、「まっすぐに切ること」を意味する「なほ（直）＋きり（切り）」で、この「なほきり」が音韻転訛して「のほぎり」となったものであろう。というのは、ノコギリによる切り方の最大の特徴は「まっすぐに切る」ことだからである。斧による木の伐採やクサビを打ち込んで木を裂く方法ではまっすぐには切れない。

5．おわりに

この論文では万葉集391番歌について、特に発句「とぶさ立て」の語義と歌の「比喩の意味」の解釈に焦点をあてて再検討を行なった。結果は次のとおりである。第一に、発句「とぶさ立て」の「とぶさ」の直接的な意味はニワトリの「トサカ」であり、これが連想によって「ノコギリ」を意味し、「とぶさ立て」は「ノコギリを立てて（船木を伐る）」という意味であること。一方では、「トサカ」はオスのシンボルであり「勇ましく＝雄々しく」の意味をもつ。第二に、第三句「船木伐り」は「比喩の意味」として「男が女に言い寄って何度もアタックすること」の意に解することができること。第三に、第四句「木に伐り行きつ」の解釈については通説の解釈で問題ないが、「比喩の意味」としては、原文「樹尓伐帰都」の「樹」を同じ乙類の「き」の別の意味「城柵」と解し、また「伐」を「こる（伐る）」と訓み、同音の別の意味「こる（懲る）」に解し、結果として「女の守りが堅くて、男は懲りてあきらめて帰って行った」と解することができること。以上、本論文で示した解釈が適切なものであるのかどうか多くの方々のご批判をあおぎたい。

6．参考文献

[1] 「萬葉集 一」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 255、1999年。
[2] 「萬葉集 四」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 174、2003年。
[3] 「風土記」、植垣節也、新編日本古典文学全集、小学館、p. 577、1997年。
[4] 「萬葉集①」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 226、1994年。
[5] 「万葉集 原文付全訳注（一）」、中西進、講談社文庫、pp. 225-226、1978年。
[6] 「萬葉集 一」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 192-193、1957年。
[7] 「萬葉集注釋 巻第三」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 436-442、1958年。
[8] 「萬葉集講義 第三巻」、山田孝雄、寶文館、pp. 661-670、1937年。
[9] 「古事記祝詞」、日本古典文学大系、pp. 416-421、1954年。
[10] 「時代別 国語大辞典 上代編」、三省堂、2005年。
[11] 「大字源」、尾崎雄二郎ほか編、角川書店、1992年。
[12] 竹生政資・西晃央、万葉集210番歌の「鳥穂」の解釈について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第13集第１号、pp. 243-250、2008年。
[13] 「日本語源大辞典」、監修・前田富祺、小学館、p. 888、2005年。